

復活節には、旧約聖書に代えて使徒言行録を読むようになっていました。これは復活が旧約聖書にはないからであり、初めて復活されたのが主イエスであるからです。使徒言行録はルカがルカによる福音書の続編として書いたものですが、そこには弟子達を中心とした使徒達が、復活の主イエスの証人となり、教会が誕生し、主イエスを信じる人々が増し加えられていったことが生き生きと記されており、そこには復活を説明しようとする記事は見当たりません。私達は確かに復活の主に出会ったのだ、私達はその証人なのだ、それだけなのです。しかしそれによって大勢の人々が信じていったことを考えると、私達に与えられている伝道の使命を見直さざるを得ないようです。

さきほど読んでいただきました使徒言行録には、フィリポがエチオピアすなわち他国の人と主なる神の導きによって出会い、洗礼を受けた場面が選ばれておりました。ここで重要なことを本日は二点学んでみたいと思います。

最初に、伝道はユダヤにとどまらず、各地に広められていったということでした。これは教会が果たした使命として極めて重要な点です。主イエスはユダヤで伝道をされました。それもガリラヤという、ユダヤの国の中では地方都市であり、中心地エルサレムから遠く離れた場所での活動でありました。広くあちこちの国にはいらっしゃることはほとんどありませんでした。しかし主は天に帰るとき、地の果てまで福音を告げ知らせよと教えられました。そしてこれが誕生した教会の主たる使命となっていたのです。伝道とは自らの生き方を示して信仰生活に励むことであり、主を指し示しながら私達が礼拝を中心とした生活を送ることです。そのなかから私達に対し主なる神から具体的な使命が与えられてまいります。本日のこの使徒言行録の記事の中で伝道を行ったのはフィリポだと思われる方もおられることでしょう。確かに主の道を伝え、救いを告げ知らせたのはフィリポでした。しかしその後姿が急に見えなくなったということからも示されていますように、フィリポは救いを伝えるために主なる神から派遣されたのであり、その使者であっただけなのです。すなわち伝道に本当の意味で遣わされたのはこのエチオピアの人であり、この人のこれからの生き方が、存在すべてが伝道となっていたのです。

教会は信徒の方々が主なる神の御心にかなう信仰生活を過ごすことが出来るため、主の民を整えるために存在しています。必要に応じて求められる第一線

の必要を満たすためにあるのです。伝道の第一線はそれぞれの社会で信仰生活を励まれている信徒の皆様一人一人であるのです。

第二に、救いを告げ知らせる重要性です。このエチオピアの人がもし、フィリポに出会わなかったら、主なる神のことを知ることも救われることも、そして洗礼を受けることもありませんでした。やはり、主の存在を告げ知らせ、必要な福音を説き、主なる神の御心にかなった道を示すのは、教会の大切な務めなのです。教会はフィリポがなしたように、この世界で救いを求めているすべての人のために存在しているのです。

私達はこの復活節に、使徒言行録から復活の証人となった使徒達の働きを学びます。そして私達もまた伝道の使命を与えられ、夫々の賜物に応じて信仰生活を過ごしているわけですが、これら聖書の時代の人々の姿から学ぶこと大であります。

彼らは悲愴感に満ちて伝道し、生きていたのではありません。私達から見れば聖書の時代の人々は大変な逆境の中にあり、信仰の喜びどころではないように思えますが、そうではなく喜びのうちに毎日を生活していたのです。聖パウロは聖書の中で読者がまだ死ぬような困難を受けたことのないのを嘆いていました。これは困難にあわなければならないということではなく、困難にあうことによって与えられる喜びの大きさを語っているのです。そのような時にこそ、復活の主との出会いがあり、信仰の成長があるのだと言っているのです。

復活の主との出会いは、理屈や議論や説明ではなく、知識でもなく、そのメッセージを心から受け止め、信じようとするものに与えられ、また逆境にある時は、主なる神から大きな喜びが与えられるときであると、本日の聖書は教えていました。なかなかそういう信仰を持ってない私達ですが、主の導きによって信仰が育てられ、主より大きな喜びが与えられるよう、祈りたいと思います。道であり、真理であり、命である主イエスが、常に私達と共にいますように。